

【書評】

藤原孝章著『シミュレーション教材「ひょうたん島問題」
—多文化共生社会ニッポンの学習問題—』

(明石書店、2008年)

金子邦秀
(同志社大学)

本書はこれまで外国人労働者問題などをいかに教えるかを世に問うてきた藤原孝章氏の既刊CD-ROM教材の普及版である。

本書は、「ひょうたん島問題」と同氏が命名した問題を学習させる。「ひょうたん島問題」とは、架空の島である「ひょうたん島」にすむ人々と、飢饉も起き出稼ぎをする人々も多い「カチコチ島」からやってきた人々、そしてのんびりゆったりしているが急に人口がふえた「パラダイス島」からやってきた人々によって、もともとは「一民族一国家一言語」であった「ひょうたん島」とその人々が抱えるようになった社会問題である。その解決を通して、多文化共生社会のありかたを考えさせるのが本書の目的である。

本書の主要な内容は以下の通りである。

第1部 実践編

第1章 3つの島-ひょうたん島物語

第2章 あいさつがわからない-異文化コミュニケーションレベル1

第3章 カーニバルがやってきた-祝祭と労働 レベル2

第4章 ひょうたん教育の危機-教育の国際化 レベル3

第5章 リトル・パラダイスは認められるか-居住地域とコスト レベル4

第6章 ひょうたんパワーの消滅-共有財産とは何か レベル5

第2部 理論編

第7章 「ひょうたん島問題」とは何か

第3部 資料編

本書の全体的な構成をみるならば、①読者にとりあえず主教材である紙芝居を通したシミュレーションを紙上でさせ、そのうえで②そのゲームの

基礎にある多文化共生に関する藤原氏の理論を説明し、③関連したデータや資料をそっくり提供することで全体が授業書=教材集となっている。

本書の意義と特徴は以下の3点に集約できる。

①シミュレーション教材としてのメリットが活かされている点。一般的には、多文化共生の問題は複雑な社会的問題であり理解がしにくい。本書は、この問題を、1) 問題の明確化を通じて本質的なことだけに焦点化すること、2) シミュレーションすべきアクターやそのキャラクターおよび役割の単純化、3) フィクションのストーリーによる特定の民族、国民へのステレオタイプの除去によって意見表明などがしやすくなっている。

②多文化共生をめぐる対立と和合がモデル化され四類型化され、ジレンマはそれら類型の相互関係だという共通の視点から捉えさせている点。本教材を通じて獲得される、普遍派人種主義、差異派人種主義、普遍派反人種主義、差異派反人種主義は、共生に関わる諸問題を考えていく上での有力な視点を与えるものとなっている。

③5つのゲーム学習は、多文化共生学習の深化発展の方向性とレベル、また、各段階で獲得すべき鍵概念・方法を明示している点。1) 異文化理解から多文化理解へ、さらにはグローバルな理解へとむかう共生教育の3段階からなる順次性を示し、2) 「あいさつ」にはじまり、「祝祭・労働」「教育」「居住・財産」をへてグローバルな「普遍的価値」にいたる共生を考える上で不可欠な視点を提供し、3) 体験的理解。ロースプレイ、ランキング、話し合いはそれらをつうじて価値の明確化や意思決定の機会を提供している。教師にとっても生徒にとっても多文化共生社会を考えるのにすぐに使用可能なこの教材の普及に期待している。